

道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して の設定趣旨

現代社会はその在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来を迎えようとしている。また、新型コロナウイルスの感染拡大などで先行き不透明な予測困難な時代でもある。このような時代や社会を生き抜いていくには、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが求められている。

これまでの学校教育では知・徳・体を一体として育んできた。その徳育の中核が道徳教育そのものであり、要の時間として道徳科が位置づけられている。学習指導要領第1章総則においては、道徳教育は「自己(人間として)の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする」(カッコ内は中学校、以下同様)と述べられている。そして、その道徳性を養うために、学習指導要領第3章特別の教科 道徳に「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己(人間として)の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」と示されている。このように、道徳教育においても道徳科でも道徳性を育むことが目標となっている。

一方で、令和3年1月には中教審答申において、これからの教育の在り方として「令和の日本型学校教育」が公表され、この「令和の日本型学校教育」のサブタイトルに「個別最適な学び」や「協働的な学び」が明記された。これらの文言は今後の学びの方向性と捉えることができる。では、道徳性を育むことをねらいとした道徳教育、とりわけ道徳科においては、どのように「個別最適な学び」や「協働的な学び」を具現化していったらよいのであろうか。まず、「個別最適な学び」とは、一人一人の児童生徒に着目してそれぞれの思いや考えを大切にするとしても、道徳科における最適な学びとはどのようなことを目指し、そして、どのように実現していけばよいのであろうか。また、「協働的な学び」とは、共同や協同ではない協働的な学びを目指すことになるわけであり、道徳科における協働的とはどのような在り様なのであろうか。さらに、「個別最適な学び」は個に着目した学びであり、「協働的な学び」は他者や学級集団としての学びであるので、このような個と集団の学びを保障していくための道徳科授業はどのように構成していけばよいのであろうか。以上のような課題意識のもとに、道徳性を育むために、道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して、研究の歩を進め、さらに深めたいと考え本研究主題を設定することとした。